



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

福島県

環境省

福島再生

REPORT

100

平成28年3月29日

福島の除染活動状況をお伝えします。

除染情報プラザ



第二部のディスカッションでは、会場からの意見も交えて議論を深めた。

福島市内で2月11日、「みんなでこれからを考える『ポジティブカフェ』」が開かれました。県外を含め、150名を超える参加がありました。

この日のテーマは「さまざまな思い・取り組みを知る 受けとめる 伝える」です。第一部では、浜通りを中心とした地域での活動内容や、そこから得られた経験、課題などを提供していただきました。続く第二部では、福島大学の開沼さんをファシリテーターに迎え、ディスカッションを行いました。

ゲストコメンテーターとして参加した相馬中央病院の越智さんが口火を切り、「情報は、その受け手に役立つからこそ伝える意味があるもの。数値など静的な情報だけでは、地域内外の方々にとって本当に必要な情報にならないのではないか」と問題提起しました。

川内村商工会の井出さんは「川内ってどんなところだろう？行ってみたい」というモチベーションにつながる発信こそが必要と発言しました。うみラボの石井さんは「行政や事業者ではない自分たちのような第三者が測った魚の放射線のデータを知ってもらい、感じたままをさらに発信してもらっている」と紹介。南双葉青年会議所の小野田さんは「事業を再開している人

もあり、その元気な姿を県外に伝えたい」と意欲を語りました。

また、誰にどんな情報が届いていないかという質問に対し、ふくしま子ども支援センターの松村さんは、そもそも「情報」より、話を聞いてほしいという母親の声を代弁しました。未来会議の菅波さんは自身の活動を振り返り、「前向きな参加者が増える一方で、不安を口にしづらくなっている人がいるので、不安を語ることのできる場が重要」と訴えました。

この日、会場には関東や関西からの参加もあり、様々な課題を様々な立場で共有する場となりました。ディスカッションを受け、会場からは、福島放射線について情報を知ることや話すことのできる機会がとても少ないという高校生の意見や、県外からの視点をもっと取り入れて県内外の方と議論を深めていくべきではないかという意見がありました。

開沼さんは、「県内外に根強く残る不安に対し、主観的な『正義』というより、客観的な『ファクト』に根差して活動している人たちがたくさんいる。そういったファクトこそ分かりやすく伝えていくべきだ」と締めくくりました。

除染情報プラザでは、今後も地域内外の方々とのコミュニケーションを続けてまいります。

みなで福島のこれからを考えるポジティブカフェ。
さまざまな思い・取り組みを知る受けとめる伝える